特集
つながりの原点
「家族」を問う

西アフリカ・マリの家族の形が物語るもの
―家族のあり方を支える住居の形態

ウスビ・サコ　*Written by Oussouby SACKO*

京都精華大学人文学部准教授

はじめに

マリ共和国（以下、マリ）では、23の民族が住み、ことばも文化的背景も異なるが、住居の形態が家族のあり方や特徴を物語っている。どの民族の住居でも、家長・男性・女性・子どもといった家族構成員ごとの居場所、家畜小屋や菜園の場所など、空間が役割ごとに分かれている。ここでは、マリの空間的特徴と家族のあり方について考察したい。

マリの概要

マリは、1960年9月22日にフランスから独立を果たした西アフリカの内陸国で、国土総面積は約124万1,238㎢、北部はサハラ砂漠の一部となっている。首都はマリ西南部の山に囲まれた平原にあるバマコである。人口は約1,452万人（2009年）で、マンデ系（バンバラ族、マリンケ族、ソニンケ族）、プル族（フラニ族）、ボルタ族、ソンガイ族、トゥアレグ族、ムーア族、ドゴン族など23以上の民族で構成される。公用語はフランス語であるが、バンバラ語、フルフルデ語、ソンガイ語、タマシェク語等の言語が日常的に使われている。宗教はイスラム教が90％、伝統的宗教が9％、キリスト教が1％とされている。気候は大きく乾季（11月～5月）と、雨季（6月～10月）の2つに分かれる。

マリの住居の概要と家族の形態

マリでは、民族によって住居（以下、画地）の構成や部屋の配置に差が見られるものの、画地を構成する部屋の形態は類似しているものが多い。マリの住居形態を①農村部②伝統的都市部に分けて概要を述べたい。

農村部の画地の概要

農村の画地の空間は、拡大家族（100人以上の場合もある）が必要とする「寝る所」「調理する所」「穀物を保管する所」「家畜を夜間に入れておく所」「食べる所」「団らんする所」「工芸品等の加工作業を行う所」などが中庭を中心に構成されている。

バンバラ族の家屋（以下、部屋）には、円形タイプと方形タイプと2つの型があるが、その構造は同じである。屋根は円錐状に、あるいは角錐状に組んだ木の上に、サバンナに生えている禾本（かほん）科の草を葺く。壁は、日干煉瓦を積み上げ、それを土やウシの糞で塗り固める。窓は少ないかまたは無く、出入口は1つだけ作り、木製の開き戸を付け、鍵をおろす。部屋の大きさは円

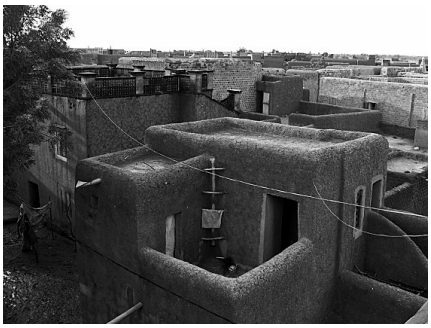

図1　マリの中庭型住宅

形・方形のいずれも1室だけで、15㎡～20㎡である。こうした部屋が、中庭を囲んで10棟前後集まり、バンバラ族の画地が形成される。中庭には井戸が掘られ、大きな木が植えられており、家庭菜園があり、構成員の部屋以外に、台所や水浴びもできる便所がある。画地の入口は1つで、その付近には最低でも1棟の接待用の部屋が設けられている。入口から見た部屋の配置によって、そこで寝る居住者の身分が表わされる。中庭の奥には主人部屋があり、その周りに妻たちの部屋、息子たちの部屋、主人の兄弟家族の部屋が並んでいる。

ドゴン族の画地は、前述のバンバラ族の画地とは構造的に、また、材料的に類似している部分は多いが、部屋の配置に対する考え方が異なっている。ドゴン族の画地の部屋の配置には、「人間」が右横に寝ている姿が表現されており、全体が卵の形になっているといわれている。その「卵型住宅」の、頭の部分には工作場、足の部分にはお祈り（礼拝）の場、手の部分には女性たちの部屋、胸の部分には家族の場が配置される。

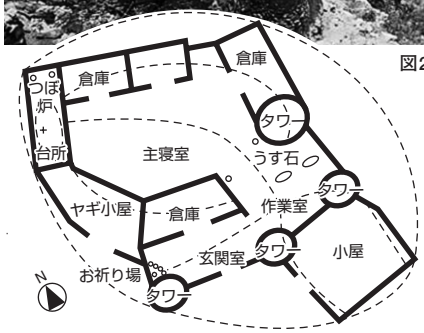

図2 ドゴン族の画地

歴史的・伝統的都市の画地の概要

最もよく知られている歴史的都市であるトンブクツ（Tombouctou）と、ジェネ（Djenne）で発展してきた建築様式はスーダン様式である。スーダン様式は、8～9世紀に西スーダン（現在のマリ）で生まれた建築様式であり、都市型建築様式として普及したのは14世紀頃である。スーダン様式の画地は、四角い中庭の周りに平屋の部屋が配置されているのが特徴である。壁は日干煉瓦を積んで、泥のモルタルで固め、その表面に草や米の籾等を混ぜて発酵させた泥が塗ってある。屋根は泥で、それを支えるのはヤシの木の小梁と藁のゴザである。入口付近に玄関が設けられ、玄関の横に主人室、妻たちや他の構成員の部屋、倉庫、台所等が設けられている。倉庫や台所は中庭に面し、部屋と中庭の間にはベランダが設けられている。屋上をテラスとして使用する場合がある。

バマコの中庭型在来住宅の概要

バマコで見られる中庭型在来住宅は、敷地条件によって様々だが、部屋等が四角い形態になっている。中庭を持つという点で、農村部や歴史的都市部で見られる伝統的住居と共通点を持っており、それらの影響は住空間構成要素や壁の材料等にも見られる。バマコの中庭型在来住宅は、高さ1・5～2 mほどの土の日干煉瓦またセメントブロックの塀に囲まれていることが多い。画地には中庭があり、中庭には木と井戸等がある。塀に沿って平家の寝室棟、台所、トイレ、倉庫が並んでいる。寝室棟には寝室が複数並んでおり、寝室の手前には前室が設けられている場合もあり、寝室と中庭の間の緩衝空間としての役割を果たしている。

マリの家族の日常生活と居住空間の特徴
―中庭・玄関室の役割と位置づけ―

玄関室の位置づけと社会的役割

マリ帝国やバンバラ王国などでかつて、王様の集会場として使われてきた玄関室（BULOW）は、今でもマリの伝統的な住居では重要な役割を果たしていると考えられる。KAMALEN BULOW、FAMA BULOW、BULOW BA、BULOW NIなど、修飾語が付けられることによって、それが集会場や裁判所などの意味を示し、玄関室が住居では最も重要な空間であることを表している。

もう一方、イスラム社会では、人間関係のあり方や家族のあり方などが重要視されている。

マリも例外ではなく、人種や宗教または家長の社会的立場によって住居の空間配置や住居のまちの中での位置付けが異なってくる。特に、玄関室がまだ残っているスーダン様式の建築はその典型的な例である。今でもアトリエ、店、コーラン学校、団らんの場、家長の個室などとして使われており、多様な使われ方が見られる。また、イスラム教を信じる家族にとっては、男性と女性の領域がはっきりと分かれており、その中でも玄関は大きな役割を果たしている。歴史都市の住民は、玄関室が存在しない画地は「家」ではないと語っている。

生活行動と家族のあり方

首都バマコのように外部からの人口流入が多い都市では、伝統的な中庭を中心とする住宅に、血縁関係のない複数世帯が居住することも多いが、就寝以外の全ての生活行動を中庭で行う生活様式は変わらない。この中で、中庭が共同生活に対処できる柔軟な空間としての役割を果たしている。居住者は、中庭で行動を行う時に用具をマーカー的に置くことにより、その行動に必要な場所を確保する。

マリの住居では、中庭や玄関室などのような緩衝的役割を担っている空間のいずれかまたは両方を残しつつ、部屋の増改築が行われるが、それらのほとんどは家族のライフステージに合わせて行われている。マリの家族のライフステージは夫婦の結婚期の「創成期」、第一子たちの自立と成長と、第2婦人の婚姻の「成長期」、第二子たちの自立と成長と第3婦人や第4婦人の婚姻の「安定期」、子どもたちの独立の「解体期」に分けられる。家族の解体は固定の「かまど」の増減に従うものである。つまり、マリで世帯とは、同じ「かまど」のご飯を食べるものをいう。複数世帯が中庭に居住する場合、同じ場所で時間をずらして行動を行ったり、同じ場所で同じ時間で行動を行ったり、様々な形の「行動場所の共有」が見られ、生活行動の行われる時間帯と場所が世帯間で柔軟に調整される。

まとめ

マリの住居では、部屋の増改築のほとんどは家族のライフステージに合わせて行われており、住居の形態は、家族のあり方に深く関わっている。近代化が進んでいない農村部では、本来の家族形態と居住形態が残る一方、都市部では拡大家族の解体、つまり世帯や家族の共同性の高さや安定性の象徴であった固定の「かまど」が複数に分割されていることによって、核家族化が進みつつあり、複数の非血縁世帯の集合居住が主流になっている。その中でも農村出身者が多く居住している都市においては、農村の居住形態の影響を残していることから、マリの家族のあり方が、根本的には変わっていないことが見てとれる。住居はその居住者の生活文化を支持するものであり、家族とともに成長し、安定して、また再生される有機的なものであることがマリの事例を通して分かる。 CEL

■参考・引用文献

●Oussouby SACKO"The Social Meaning of (THE VESTIBULE) in Sudan Style Architecture of Mali Historical Cities: Timbuktu and Djenné"The 16th World Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES), Kunming 2009

●ウスビ・サコ「バマコの中庭型在来住宅の『集合住宅化』と中庭での生活行動の研究」京都大学大学院工学研究科　博士学位論文（一９９９年）

●Susan DENYER"African Traditional Architecture, An Historical and Geographical Perspective"AFRICAN PUBLISHING COMPANY NEW YORK 1978

●Suzanne P. BLIER"The Anatomy of Architecture, Ontology and Metaphor in Batammaliba Architecture Expression"Cambridge Univ. Press 1987

●赤阪賢「マリ・広場のある集落―バンバラ族―」（吉阪隆正ほか「住まいの原型2」鹿島出版会、１９７３年）

ウスビ・サコ（Oussouby SACKO）

京都精華大学人文学部総合人文学科現代文化表現コース准教授。１９６６年マリ共和国生まれ。中華人民共和国・北京語言学院（現・北京語言大学）に留学。その後、南京東南大学で建築学を学び、卒業後は京都大学大学院建築学専攻博士課程などを経て現在に至る。研究対象は住宅計画・住まい・住み方の研究。住宅デザインと生活様式の関連を様々な国で調査している。